

研 究 紀 要

地 理 歴 史 科 ・ 公 民 科 部 会

- 講 演① 「テレビ番組制作に学ぶ授業づくりについて」
NHK メディア総局第三制作センター
チーフ・プロデューサー 亀 山 暁
- 講 演② 「プロジェクターを活用した授業実践について」
株式会社サカワ 東京支店
I C T事業部 営業課 菅 原 孝太郎
- 研究発表 【日本史分科会】 「1年越しの研究発表 1年間の実践から得たことと今年度のチャレンジ
-キーワードは「学び合い」「GIGA」「学びを楽しむ」-」
青森県立三戸高等学校 赤 井 翔 太
- 【世界史分科会】 「「差別」について考える一歴史的事象を自分事として捉えるための試み」
青森県立五所川原農林高等学校 嶋 津 佑 希
- 【地理分科会】 「私の授業実践（とくに地形図と日本地誌）」
青森県立青森高等学校 川 崎 淳 平
- 【公民分科会】 「コンテンツとしての授業とカリマネと風呂敷のような公民」
青森県立三本木高等学校 氣 仙 祐 禎

紀要編集委員 小笠原 博 樹（青森県立七戸高等学校）
成 田 正 次（青森県立七戸高等学校）

『テレビ番組制作に学ぶ授業づくりについて』

NHKメディア総局第三センター

亀 山 暁

1 はじめに

1995年にNHKに入局し、青森放送局勤務が最初で、1999年まで4年間青森で暮らしていました。その間に妻に出会い結婚し、現在は東京に住んでいます。妻は青森南高校出身で、私の母の実家は八戸です。だから青森県とは関係が深いと感じています。母は里帰り出産をしたので、私の生まれは八戸です。ただ、2カ月ほどで東京に戻っているのも、本当に青森で暮らしたのは青森放送局で勤務した4年間ということになります。青森放送局に勤務していた時、ニュースを読むお姉さんとふとしたことから誕生日の話になったことがありました。誕生日が一緒に年齢も一緒。生まれた病院も一緒。完全に同じ日に同じ場所で生まれた人に出会うという一生に二度はないであろう経験を青森ではすることができました。

NHKに入局し様々な番組を制作してきましたが、現在は「ブラタモリ」という番組を制作しています。1つの番組を制作するために何十人という専門家の方に話を伺うので、もしかすると、この中にブラタモリの制作でお世話になった方がいるかもしれません。「ブラタモリ」はそうして出来上がっていく番組です。私の立場は管理職で、肩書はチーフプロデューサーです。ディレクターをはじめ、部下が色々調べてきた内容に対して、「こうした方が良い」とか言いながら番組を最後まで作って放送して、番組をご覧になった方から褒められたり褒められなかったり…。「ブラタモリ」はチーフプロデューサーが4人いて、順番に番組を制作しています。私が最近担当した回は「関ヶ原の戦い」。青森県関係で言うと去年放送した「恐山」の回です。NHKプラスの見逃し配信サービスでは「関ヶ原の戦い」と「恐山」の回は有難いことに再生回数が多かったです。特に「恐山」の回は反響が大きかったです。「ブラタモリ」はタモリさんのキャラクターもあって普段はさらっとしているのですが、「恐山」の回は「泣けるブラタモリ」としてインターネット上で話題になり、様々な人に観ていただいて褒められることも多かったです。今日は「ブラタモリ」をどう制作するかの話も含め、テレビ番組を制作する時にどうやっていくのかについて、具体例を示しながら話をしていきたいと思います。

2 みんなが知りたいのは「知ってる人の知らない話」

「1945年8月15日に天皇陛下が玉音放送を行った」

テレビ番組で扱うこともありますし、授業で扱うこともあると思います。テレビ番組で扱う場合で考えてみます。歴史に興味がない人たちや若い人たちにとっては「ふーん。」という感じのものです。番組を制作する際には「どういう話と同じくらいのレベルか。」を考えます。これは「蒲田に住む鈴木さん(78)が犬を飼い始めた」という話とあまり変わらないと思います。番組を制作する時に、「天皇陛下が玉音放送を行ったのは歴史的大事件だから、みんなすごいことだと思っている！」と思い込んで制作すると大抵失敗します。番組を観る人によっては「蒲田に住む鈴木さん(78)が犬を飼い始めた」という話とほぼ同じレベルだと思って番組を制作するところからスタートします。興味をもってもらうにはどうしたらよいかを考えます。玉音放送の番組は取り扱ったことがあるのですが、NHKの番組を外部に持ち出すことはいろいろと難しいので、番組っぽくスライドを展開していきたいと思っています。

「知らない人の知らない話」にはだいたい誰も興味をもてません。天皇陛下も蒲田の鈴木さんも高校生からしたら似たようなものです。玉音放送をしようが犬を飼おうが同じく知らない話です。興味をもてなさ具合は一緒ということです。でも人は「知ってる人の知らない話」には興味があります。ワイドショー的な番組がこれにあたります。誰と誰が離婚したとか、自分の生活には関係ないのに知りなくなるのは「知ってる人の知らない話」です。逆に「知ってる人の知ってる話」は聞く必要がありません。「蒲田の鈴木さん」は知ってる人ではないので、ワイドショー的なネタに持ち込むのは難しいものがあります。

3 「知らない人の知らない話」はストーリーの面白さで勝負！

「知らない人の知らない話」に興味をもってもらうためには、事実に面白さで話に引き込んでいくしかありません。単純に事実が並列的に出てくるだけだと人は興味をもてません。事実から面白いストーリーを見つける興味をもてるようになります。「ブラタモリ」は主にこの手法です。事実から面白いストーリーをどう見つける

か。例えば「恐山」の回では、恐山という場所を知らないし特に興味がない人に対して、色々な事実を色々な順番で出していきました。あの時は、境内の入り口に三途の川があるという面白い話から入ってみました。面白い話から入って、謎解きをするかたちで引き込んでいくという「ブラタモリ」の手法です。

では「1945年8月15日に天皇陛下が玉音放送を行った」という場合に、私だったらどう番組を制作するか。本当だったら制作した番組を流せばよいのですが、できないので簡易的に静止画と文字でそれっぽいものを作ってみます。いかに人に興味をもってもらうように伝えるか。興味をもってもらう方法は絶対的な正解があるわけではありません。100人いて100人全員が面白いと思うことはまずありません。だからそれなりに多くの人が面白いと思ってくれるでしょうとかたちで制作します。ですから今から話すことも、自分ならこう作るというだけの話です。

4 玉音放送を例に

例えば、書類から入ったりします。「古ぼけた紙に書かれた一つのサインがある。」そんなふうが始まる番組ありますよね。サインを見ていくと、その1つは陸軍大臣阿南惟幾のサインです。このサインが書かれたのは1945年8月14日でした。阿南はこのサインを書いた後自決しました。これが阿南にとって生涯最後の公式なサインとなりました。阿南が最後のサインをした文書とはいったい何だったのでしょうか。阿南のサイン書かれている直前のページに「裕仁」のサインが見えます。その下に天皇御璽の印。天皇が最終的に決定する御名御璽が入っている文書です。これは公文書の中では最も格が高いものとされています。この文書は何のために作成されたものだったのでしょうか。内容を見てみましょう。こういう一節があります。「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」と書いてあります。天皇陛下が自らの声で戦争の終結を呼び掛けた玉音放送の原稿です。この文書と阿南の死にはどのような関係があるのでしょうか。この文書には天皇陛下が読み上げるものにしては不可解な部分があります。例えば、急遽書き加えている部分がある点です。本来天皇陛下が自ら署名する文書というのは、総理大臣はじめすべての大臣が確認してサインをします。修正する必要がある場合は、最初から書き直すのが決まりです。しかしこの原稿はそれをする時間がありませんでした。急遽書き加えなければいけないくらい、唯一、御名御璽が入っている文書の中で修正されているものなのです。普通ならあり得ない文書です。よく見ると少し汚れているように見えます。その箇所には「戦局必ずしも好転せず」と書いてあります。なぜ汚れているかというと、カッターのようなもので削って修正しているからです。実物をみると毛羽立って薄くなっています。修正前の文書は「戦局日にあらずにして」と書いてありました。「戦局は日ごとに劣勢になるので」という意味で、敗北を天皇陛下自らが認めるという内容でした。この内容に激しく反対したのが阿南でした。阿南が反対したのは、陸軍の若手将校たちは戦争を続けるべきだと考えていて、戦争をやめるならクーデタを起こすと言っていたからです。海軍大臣米内光政は「もう負けだ」と言いました。しかし阿南からすると「負けだ」言っているのはほとんどの艦船を失っていた海軍の話で、陸軍にはまだ500万人の兵士がいて、本土決戦を最後の戦いにしようと考えていました。陸軍的にはまだ負けていないという考えでした。血気盛んな若手将校たちは、「我々はまだ負けていない」と頑張ろうとしていました。阿南はこのままだと若手将校が納得しないと言って「戦局必ずしも好転せず」つまり、「日ごとに劣勢になる」と書くと負けを認めることになるから「好転しない」という表現にしてほしいと要求しました。そして阿南の要求通りに修正が行われました。ところが、8月14日の深夜、陸軍若手将校によるクーデタが発生してしまいました。未遂に終わりましたが、近衛師団長が殺害されています。阿南は、閣議では負けを認めようという話になっている一方陸軍若手将校の動きを知っていたので、一生懸命止めようとしたが止められなかったのです。阿南はクーデタを止められなかった責任と、敗戦の責任をとって死のうと決めました。8月15日未明に阿南の様子がおかしいと腹心の部下が訪ねてきました。阿南はしばらく酒を断っていたが、その時は酒を飲み饒舌に色々話をしていました。部下が「私も一緒に」と言いましたが、阿南は「死んではならんぞ」と言って結局一人で切腹をしました。

このあとに続けるとすれば、玉音放送がいかに混乱した状況の中でできたものなのか。阿南はいつも兵士に「死ぬなよ」と言っていました。「死ぬな」と言っていた人が、最後に自分で命を絶つということが起こっているなかで玉音放送がなされたということです。クーデタ(宮城事件)があつて近衛師団長が殺されたりしましたし、天皇の玉音放送のレコードを放送させないために若手将校が探しまわって、その録音盤をぎりぎり守るという混乱もありました。その中で行われたのが玉音放送だったという構成になるのかなと思います。要は「天皇陛下が玉音放送をしました。日本にとっては敗戦を事実上認めるものです。」みたいなことだけだと人は興味をもてないということです。自分の中ではいろいろな人に取材をして、阿南という人物が共感できる部分が多かったのも、阿南

を軸に玉音放送をやっていったらどうかと思いました。あくまでも一例です。

それでは「蒲田の鈴木さん」の話に戻ります。「おはよう日本」で動物と暮らす高齢者という特集もたまにあったりします。自分がディレクターならどうするか。事実から面白いストーリーを見つけるという話をしましたが、「面白い」とは何なのか考えてみます。

4 「面白い」とは何か

私は、中高生時代はいわゆるガリ勉でした。テレビとか映画とか観ていませんし、友達とバンドをやったりもしていない、甲子園を目指して部活に勤しんだこともありません。ひたすら勉強していました。当時は模擬試験の上位に入るとテレホンカードがもらえました。受験料を3000円払って、上位に入ると5000円のテレホンカードがもらえました。2000円浮くのが楽しくて、模擬試験を受けまくってテレホンカードを集めまくって、テレホンカードを逃したくないから勉強するという、勉強するモチベーションとしては崇高ではありませんでした。集めたテレホンカードを大学に入ってから使い始めて、使い切るのに4年かかりました。普通は「勉強して何の役に立つのか。何に繋がるのか。」と考えます。自分は全くそんなことは思わずにテレホンカードを目指して勉強していました。疑問に思わず勉強できるのは一つの才能だったと思うようになりました。私は娘が一人いて、娘は勉強を頑張るタイプではありません。娘を見ていると「普通こうだよな。自分がおかしかったんだよな。」と思います。NHKに入局して、企画書を書けと言われて、調べてロケの構成を書いて上司に見てもらおうと、よく「面白くない」と言われましたが「面白くない」という意味が分かりませんでした。自分にとっては正しいか正しくないかしかなくて、なぜ自分は「面白い」という感覚が分からないのかと思っていました。たまにラッキーで「面白い」と言われても、この間自分が作ったものと何が違うのか分かりませんでした。天才的に「面白い」ものを作れる奴はいますが、自分はそうではなくて「なぜ人はこれを面白いと思うのか」と考え続けてきました。

では面白いストーリーとは何なのでしょう。大体は、対決がある、感動する、切ない、友情がある、大きな理が存在するものだと思います。例えば、NHKの「ガッテン!」という番組は、高血圧にはこれがいいとか具体的な処方箋も面白いですが、「高血圧はこういうものなんだ」という大きな理があったことが、番組が長続きした要因ではないかと考えています。「プラタモリ」も大きな理を目指している番組で、「恐山」の回は「今回恐山について何を伝えるか」、「恐山はなぜあの場所なのか」、「なぜ人が集まってくるのか」と表向きはやっています。しかし私とディレクターが裏側で狙っていたのは、現代社会が「死」という臭いを排除していて、排除しているがゆえに生きている実感を感じにくいということでした。そして恐山に行くと死者が本当にいそうな世界なので、逆に自分が生きているという実感をするのではないかと。人は言語化していなくてもそういう実感を求めて生きているということ。それが「恐山」の回の大きな理ということかなと思っています。

5 大中小理論

もう一つ、番組（面白いストーリー）を作るときに考えていることがあります。それは「大中小理論」という自分が勝手に考えた理論です。人の話とか番組の面白い、面白くないはどことが分かれ道なのか考えていたら、この理論に辿り着きました。情報で言うと「中」はすぐに集められる基本情報です。例えばある壺があるとして、この壺は清朝の時代の壺で、世界に5つしかありません。重さはこれくらい、大きさはこれくらいで、誰が持っていて…など割とすぐに集めることができる基本情報のことです。この話だけで進んでいくと、大体つまらない番組になります。では、どこに面白さを感じるのでしょうか。それは「小」、つまり取材に行つて初めてわかる細かい情報です。それが話の核とかきっかけになります。玉音放送で言ったらカッターで削った跡があるというのはほぼ知られていなかった話です。壺で言ったら小さなひび割れがあって、そのひび割れは実は信長が投げた下駄が当たった跡となるとストーリーが出来上がってきます。その方が面白いのです。では「大」は何なのでしょう。それは、情報源をどういう目線でまとめると誰のどういう部分に刺さるのかということだと思います。例えば親子で番組を観てほしいとなると、我々は子どもを狙います。子どもが親に対してマウントをとれそうなものを狙うのです。そうすると子どもも気分が良いですし、親も子どもが生き生きと話していると嬉しくて、それが親子視聴に繋がります。誰のどこに刺さる内容としてまとめるかということを考える。これが「大」だと思っています。「恐山」の回で言えば、現代社会は死を遠ざけていませんかというのが「大」にあたります。「関ヶ原の戦い」の回だと、戦いは常に切なさを生むというのが「大」にあたるのだと思います。関ヶ原は狭い盆地です。その中をタモリさんと一緒に歩き、「ここで始まって…」というふうに話を追っていきました。戦いは切なさを生むものだなということをタモリさんに感じてもらえないか、視聴者に感じてもらえないか、と考えていました。

ではどうすれば気になるように、興味をもてるようになるのでしょうか。

ここで「蒲田の鈴木さん(78)が犬を飼い始めた」の話に戻ります。この話は、普通は興味をもてません。だから、どうやったら興味をもってもらえるのかと考えて取材をしていきます。例えば、取材してある情報を1つ加えたとしみましょう。「初めて」と入れる。ちょっと気になってきませんか。78歳の人が初めて犬を飼うとはどういうことだろうと。情報を伝えるときに、何か気になってもらえるような情報を入れる。そうすると興味のとっかかりになるのです。78歳の人が初めて犬を飼うというのは、何か理由がありそうですね。

前述したように、「小」の情報は面白いものが多いです。例えば日本の「家」に対する考え方を例にすると、日本国憲法が制定されて家長が廃止されるなど、家族の形という考え方が変わりました。それを伝える時に、例えば「入籍しました」という言葉は現在では間違いです。結婚を意味して「入籍しました」と言うのは実は戦前の考え方です。戦後の結婚制度は違って、お互いに実家の戸籍から抜けて新たに戸籍を作るので入籍とは言いません。現在入籍という言葉が使えたとすれば、養子縁組の場合などです。結婚は「入籍」ではなく、あえて言えば「作籍」でしょうか。というところから話を始めてみたりすると、家に対する考え方の違いに興味をもてるかもしれません。「結婚しました！」だと馬鹿っぽいけれど「入籍いたしました」だとそれっぽい。畏れ多いときの正しい言い方が現時点ではないということです。調べてみると割とこういうのが見つかります。他にも「独壇場」はもともと「独擅場」（どくせんじょう）が本当の言葉です。字が違います。本当は手への「擅」でしたが誰も読めず、「どくだんじょう」と読んでいたうちに「独壇場」と漢字まで変わってしまいました。広辞苑の編集部取材に行って初めて知ったことがあります。それは魚の縞模様についてです。カクレクマノミなどの縞は我々には縦縞に見えますが、広辞苑編集部の人に聞くと、横縞なのだそうです。どういうことかということ、人間がボーダーのシャツを着て泳いでいるのが魚の状態なのだそうです。脊椎動物の縞は脊椎に対して直行していたら横縞で、脊椎に平行していたら縦縞なのだそうです。他にも広辞苑に収録される言葉はどうやって決まるのでしょうか。例えば、「アイドル歌手」という言葉は入らないのだそうです。なぜなら「アイドル」と「歌手」を調べてくっつけると意味がわかるからです。調べてわかるものは入れないのだそうです。しかし「バツイチ」は収録されました。「離婚を一回しました」という意味と、自分で「バツイチです。」と言うとき時のニュアンスは違うということだそうです。少し自嘲気味な感情が入っているからこれは入れようとなったそうです。「アイドル歌手」が入らなくて「バツイチ」が入るのは面白いと思います。このように「小」の情報は意外と面白いものが多いです。

「蒲田の鈴木さん」の話に戻ります。「初めて」犬を飼ったという話にすると、ストーリーが始まる気がします。ここから番組を制作するとすれば、例えば、実はこの鈴木さんは小さい頃噛まれたことがあって犬が苦手です。それなのに78歳にしてついに犬を飼った理由はなんなのでしょう。それは孫のためでした。孫が元気を失って不登校になってしまって、孫が動物好きだから動物を飼ってみてはどうかと考えました。孫を励まそうと思って、アニマルセラピーみたいな感じで飼い始めたのです…という話になると、「蒲田の鈴木さん」もちょっとしたストーリーになります。最後、どう話の落ちをつけるかはどこで話が終わったかをわかるようにしてあげることが大切です。大中小理論で言ったら「大」の部分です。この話で言うと、「愛情の示しかたは人によってそれぞれだけど、愛情は示したいものだよね。」という終わり方でしょうか。

「ブラタモリ」に話を戻すと、「関ヶ原の戦い」の回はこのような流れです。関ヶ原にやってきました。関ヶ原の戦いの勝敗は、地形が大きい要因となっていました。「東軍と西軍の陣の配置を見てみましょう。」とジオラマを示します。関ヶ原盆地は西高東低のなだらかな扇状地です。西軍がことごとく高い位置に陣取っているというところからスタートします。ですから最初の布陣で言うと西軍が圧倒的に優勢でした。どう考えても東軍に勝ち目はない布陣だったのです。事実、戦闘を開始してしばらくの間、西軍が優勢に戦いを進めていました。関所を囲う土塁まで使い、高いところを押さえて戦いを進めていました。中でも優位に戦いを進めていたのが、石田三成の右腕と言われていた島左近です。しかし、東軍の鉄砲隊の奇襲攻撃に倒れました。島左近の陣は見晴らしがよい場所が多く、奇襲攻撃と言ってもどこから奇襲したのでしょうか。奇襲を仕掛けたのは黒田長政の鉄砲隊でしたが、黒田の陣は島左近の陣から1キロ程離れていました。1キロ先から撃っても届くわけがありません。ではどこから撃ったのでしょうか。実はちょうど隠れ道みないなものがあったのです。関ヶ原盆地は西が高く、一度低くなってまた高くなっています。ちょうどその低いところを通り、島左近のすぐ横に出て撃ったのではないかとされています。そこから形勢が変わり、徳川家康の3万の軍勢が前に出てきました。その様子を見ていたのが小早川秀秋でした。小早川はとても高い山の上に陣取っていて、戦うつもりはなく高みの見物をしていました。家康軍が出てきたのが見えたものの、後ろにいるはずの毛利軍は動きませんでした。これを見て東軍が勝つ

ことを確信して小早川は西軍から東軍に寝返りました。そこで一気に西軍は崩れていき、大谷吉継も頑張りましたが負けてしまいました。「西軍が負けた」という話はタモリさんはわかっていますし、テレビを観ている人の多くはわかっています。最後は「地形は利用できたが、人の心までは利用できなかった。戦いは結局切なさを生んでいく。」というふうにならなくなっていきます。常にどう終わるのかを考えて番組を制作しています。

『プロジェクターを活用した授業実践について』

株式会社サカワ東京支店 ICT 事業部営業課
菅 原 孝太郎

1 自己紹介

ただいま紹介にあずかりました株式会社サカワの菅原と申します。今紹介にもあったのですが、弊社は元々黒板製造をしている会社です。ここ近年では ICT の事業の方に注力させてもらっているという背景で、僭越ながらプロジェクターを活用した授業実践ということで講演をさせていただきます。

2 会社紹介

まず会社の簡単な紹介なのですが、株式会社サカワと申しまして、黒板の製造をやっている会社でございます。愛媛県に本社があるということで、名刺交換する際に「珍しいですね」と言われることがあるのですが、私自身は東京支店の関東出身の人間でございまして、愛媛の話になると浅いアウトプットになりがちですので、ちょっと今後勉強していかなきゃなというところがあります。

そして、簡単な沿革なのですが、大正 8 年創業の黒板製造会社ということで、今年 104 年目の老舗企業になっていきます。ここ近年は、電子黒板やアプリケーションやプロジェクターに注力して事業を展開しております。こちらんまりとした会社なのですが、ありがたいことに多くのメディア様に取り上げていただいて、直近ですと「Mr. サンデー」という日曜日の夜にやっている、宮根さんが司会をしているニュース番組に取り上げていただきまして、それを森田校長先生がご覧になって講演のお話をいただいたということです。老舗だけれど ICT など新しいことにチャレンジしたりというその変遷の部分を取り上げていただいたりという取材実績があります。

こちらが展示会の様子の写真なのですが、全国の ICT 教育とか ICT 関連のイベントに商品を持ってブースを出展させていただくことが多いです。青森で言うと、今度の 10 月 27、28 日に全日本教育工学研究所協議会、通称 JAET（ジャエット）という団体が運営する協議会の青森大会がありまして、出展予定となっております。

3 大型提示装置（ICT 機器）の説明

大型提示装置の役割と整備状況を簡単に見ていきたいと思います。ICT の分野でいうと大型提示装置はいわゆる電子黒板だけではなく、普通的大型ディスプレイだとかプロジェクターも該当します。一つの授業の中でも色々なシーンがあると思います。それぞれの提示装置に役割があり、例えば一斉学習だと写真や動画などの教材を表示して、生徒への興味関心を高めるといった役割があります。個別学習でも、現在の主役は一人一台端末だと思いますが、例えば授業支援のアプリケーションで生徒が解答して、その解答を並べて見せる時に、個別学習の課題でも大型提示装置の役割が出てくると思います。協働学習においても発表や話し合いなど、また学校の壁を越えた学習だと遠隔授業の時にはマストになってくる ICT 機器かなと思っております。

提示装置の直近の状況です。昨年度のデータなのですが、全国でみると普通教室の 83.6%に提示装置等がついているという状況のようです。GIGA スクールの背景があり、一人一台端末の整備によって提示装置の普及も比例して増加しています。整備が進んだことによって使用頻度が上がっており、ほぼ毎日使っているという学校がどんどん増えているという状況がうかがえます。

では次に提示装置の種類について見ていきたいと思います。今日は大きく 2 つに分けて、モニタータイプとプロジェクタータイプについて説明したいと思います。それぞれの特徴ですが、モニタータイプは、非常に多機能なものが出てきています。OS が内蔵されていてパソコンで授業ができたり、指タッチで触感的に操作出来たりというものが増えてきています。OS 内蔵ということは「大きなスマホ」とか「大きなタブレット」という考え方もできるという時代になってきています。サイズは、普通教室に置くサイズでいうと大体 65～75 インチが主流になっています。設置でいうと、教室前方のサイドどちらかに置けるスタンドタイプが多いと思います。非常に高画質な 4K タイプもラインナップとして増えてきているので、明るくて見やすいというのがモニタータイプ、の特徴だと思います。次にプロジェクタータイプですが、「黒板完結」と書かせてもらっています。黒板やホワイトボードを投影面として授業に使うことができるので、黒板で授業が完結できるということです。板書も映像もここで組み合わせながら使うという意味では、併用のしやすさはモニターと比べるとあると思います。一般的に普通

教室に置かれるサイズとしては80インチ～130インチくらいで、モニターに比べると少し大きく生徒に見せることができると考えています。設置でいうと、天井、壁、卓上など、施工すれば比較的教室の小スペースに設置できるという特徴があります。電子ペンを使えるものや電子黒板機能を有したものもあります。モニターの部分で説明するのを忘れていたのですが、モニターを選ばれる傾向としては、教室に置くスペースがあり映像の授業を増やしていきたいとか明るさなどを重視していきたい先生方の学校に選ばれる傾向があります。それに対してプロジェクターは小スペース化を図りたいとか、映像の大きさ、黒板の併用を大事にしていきたいというような黒板を重視したい先生方はこちらを選ばれることが多いです。今、黒板と併用というお話をさせていただいたのですが、大型提示装置を設置しても黒板の役割は残っていくだろうというところで、使い分けについても簡単に説明したいと思います。黒板はどちらかというと静的なものです。文字とかを簡単に書けるものとか、しばらく授業の中で残しておきたいポイントや課題などを書き留めておくという使い方です。それに対して提示装置は、動的なものとか複雑な細かいコンテンツとかを写すのに適しています。使い分けが非常に大事になってくるというところで、提示装置を導入しても黒板の授業は生徒の話をまとめる役割があるということで、上手に活用することが大切なのかと、黒板メーカーとしてもプロジェクターメーカーとしても考えております。

次にモニタータイプとプロジェクタータイプそれぞれの課題も見ていきます。まずモニタータイプです。サイズが少し小さいものが多く、教室の端の方に置かれると見えづらいという課題があります。本当は中央に置きたいけれど、スペースがないので動かせないという課題があります。そもそもスペースがないので設置できないというのも課題の一つだと思います。黒板との併用についても、黒板とは離れた位置にモニターを置かれることが多いと思うので、板書との併用のしにくさが懸念されるという声をいただいたりします。続いてプロジェクタータイプなのですが、プロジェクターの映像が黒板のセンターに来てしまい、板書が横断してしまうというのがプロジェクターを使用する場合の課題だと思います。こちらの東高校さんは黒板サイズが大きいのでしっかり板書スペースがとれるかと思いますが、大体360センチくらいの横が小さめの黒板だと板書が横断してしまうという課題をお伺いしたりします。また、モニターと比べると少々暗いので、スクリーンを併用したり投影面を見やすくしたりする必要があります。あとは、昨今の機種は該当しないのですが、水銀ランプ性のプロジェクターですと、ランプの寿命に伴って交換が増えたりすることも課題の一つだと思います。あとは投影サイズです。これもプロジェクターに依存するかなと思うのですが、プロジェクターの映像をスクリーンに収めるので、少し小さくなってしまいうという課題があると思います。

4 ワイドプラスとは

そのような提示装置の課題を払拭でき、かつ黒板との併用のしやすさが多くの学校様に評価いただいているプロジェクターがあります。それが今回置かせていただいている「ワイドプラス」というものです。導入実績ですが、おかげさまで全国5600台以上導入させてもらっていて、東京23区の一部の区で全小中学校様に入れさせていただいたりしています。特徴なのですが、映像サイズが130インチマックスで映るプロジェクターとなっていて、超短焦点でこの距離感で広角に映せるというのが一番わかりやすい特徴だと思います。アスペクト比が16:6ということで黒板サイズに合うような縦横比で投影出来る点が大きな特徴です。リモコンで映像サイズも切り替えることができます。切り替えられるといいことがあるという点は後ほどご紹介しようと思います。それから黒板の湾曲に合わせてフラットに映像を見せるように映すことができます。映像が大きいことの良い点は、従来のプロジェクター二台分なので、資料を並べて見せることができます。例えば、パソコンの画面を真ん中で分割してデジタル教科書を見せたりとか、画像を並べたりとか、動画を並べて見せるという使い方もできます。2系統同時出力が可能になっていますので、先生のパソコンと生徒のタブレットをつないでいただければ、それを同時に並べて見せることもできます。今まででは入力切り替えや映像切り替えをする必要がありましたが、それを同時に並べて見せる、並べて比較しながら解説できるということで、授業のスピードが上がったという声もいただきます。さらに、デジタルスライド機能という機能がございまして。ちょっとやってみようと思います。今日は青森市の学校ということで、こちらのモニュメント（大間崎のマグロ像）をこちらに動かしていきたいと思っています。現在映像を小さくして左真ん中に置いています。プロジェクターは真ん中に設置しているのですがデジタルで移動できるので、課題にあった映像が真ん中に来てしまって板書がしにくいという点についても映像を動かして板書スペースを確保しながら授業することができるようになっています。ですので、従来のプロジェクターを左右どちらかに寄せてつければ板書スペースができると思うのですが、教科によっては左に板書スペースが欲しいとか右に板書スペースが欲しいとかあると思うので、こちらワイドであれば簡単にスペースを作るこ

とができる、移動できるという製品になっています。光源はレーザー光源を使っています、寿命が長いです。また従来のランプ性のプロジェクターと比べると起動までの時間が短く 10 秒程度で最大輝度に達します。設置方法ですが、壁掛けしたり吊るしたりすることが多く、小スペースでも使えるようになっています。導入事例なのですが、こちらはワイードの導入と一緒に、黒板をホワイトボードに貼り替えて映像を見やすくした導入事例になります。弊社は、ワイードの取り付けはもちろんですが、もともと黒板メーカーなので普通の黒板の上からホワイトボードに貼り替えるという施工も一緒にやったりします。こちらは漢文の先生例ですが、今までかなり板書に時間がかかっていたと手間と時間が削減されましたというお声があります。また、こちらの先生は、普通のホワイトマーカーを持って映像の上から書き足して板書と組み合わせて使っていますという例になります。さらにこちらの先生は資料を左右に並べている例なのですが、同じパワーポイントを 1 つのパソコンの中で左右に同時に開いていて、片方に今、先生が説明しているスライドを置いておいて、もう片方には先生が 1 つ前に説明したスライドを置いておいて生徒がノートを取りやすくするという例になります。例えば説明しているスライドの中で、何ページか戻って参照したいスライドがあれば、片方に開いた状態で参照したいものをもう片方に開いて説明するという使い方もできます。

ここで、実際の授業例をお見せしたいと思います。電子ペンが本体とパソコンとプロジェクターとつながっているので投影面での操作が可能になっております。投影面上でアプリケーションを切り替えることもできます。また電子ペン 2 本を使いスクロール等もできます。あとは画面並べの例なのですが、中国の地理を授業の中で、面積の割合と人口の割合を説明しながら別の地理の情報を説明したいというシチュエーションがあったときに、投影面を分割して説明ができるのですごく便利かなと思います。デジタル教科書なんかも映して使った方がいいと思いますが、1 枚のページを映すと資料がさすがに見えないと思うので、これも投影面上で拡大して見せることができます。専用の電子ペンのソフトがありまして、これをインストールいただくとブラウザ上からペンで書けたりもします。もちろん色も何種類もあるので、選んでそれぞれ書いていただければと思っています。さっき説明が漏れてしまったのですが、画面並べもソフトで簡単にやることができまして、ボタンを押していただくと四角形が何個か出てくるのですが、これ押す、あるいはパソコンで開いているウインドウを選んで、並べて見せたいものを選んでいただければ簡単に見せることができます。話がそれてしまうのですが、ガイド線なんかも表示できます。電子ペンを使っていたとしてもいいですし、アナログのペンで上から書いていただいてもいいです。あと、4 分割されたガイド線もありますので、ここに例えばあらかじめパソコンの中に用意していたものがあれば差し込んだりして、いろいろと配置して使うこともできます。電子ペンも組み合わせていただければ、いろいろデジタルに書いたものを他の授業で流用したりとか、こちらのボタンを押していただくと板書したり、画像を張り付けたものをデータとして保存して残しておくこともできます。あとデジタルのいいところというと、デジタル上の画面で板書をしたり画像を貼ったりすると板書スペースが埋まってきてしまったりすると思うのですが、スクロールしていただければまた無限に板書のスペースが広がっています。ここでまた板書をしていただいたとして、先ほどの画面は消していないので戻っていただければ復習もできるという使い方があると思います。あとは、授業プリントでプリントの左側に板書スペースを作っていただいて、説明した後に授業プリントの穴埋めということで板書と組み合わせて使っていただくような使い方もできると思います。こういう感じで画面のサイズが大きいので、板書スペースを作ったりだとか資料を並べたりというときや、1 つの知識をインプットするのにはそれに付随する別の知識が事前情報として必要といった知識が求められる時に、様々な知識を同時に見せたいというシチュエーションの時にこういう画面があると有効活用できると思います。

スライドに戻りまして、ワイードのまとめなのですが、アスペクト比 16 : 6、130 インチということで横が大体 3m 前後くらいの大きさで、サイズエクセルというのが一番大きな保障になっています。リモコンで左右に映像を送れるという機能を兼ね備えている、つまり、大きい映像サイズの中で映像を小さくして、左右に置ける場所も強みの機能となっております。そしてレーザー光源なので起動時間が速いということと、長寿命なのでランニングコストがかからないということになります。

5 ブルーグレー黒板と Kisepa (キセパ) とは

こちらのプロジェクターをよりよく使っていただくということで、これは黒板メーカーならではの、「ブルーグレー黒板」という映写黒板があります。これが実際のブルーグレー黒板なのですが、普通の黒板と比べると明るい青みがかった色をしておりまして、グリーン系の黒板と比べると比較的きれいに映像が見えて、黒板なのでチョークで映像の上から書けるという使い方ができます。映像も通常の黒板よりはきれいに見せたいし、板

書もしたいという先生方に一緒にご提案させていただくこともあります。

あともう一つ、着せ替えパネル「KisePa（キセパ）」というもので、さっきまで貼ってあったのがまさにこれです。着せ替えパネルでして、どういうものかという、近いのはマグネットスクリーンかなと思います。それよりは耐久性があって、もちろん書き消しもできます。黒板を簡単にホワイトボード化できるというものになっております。そもそもワイドの映像サイズのスクリーンが世の中にあまりなくて、あっても結構貼るのが難しいというので、パネル型だったら簡単にきれいに貼れるのではないかとということで最近開発しまして、9月1日に発売予定というものになっています。そして、8枚分割して貼るので、社内の誰かが言った一言で「これ外して配ればいいじゃん」ということで、8分割を配るとグループワークとかでも配れて、そこにマーカーで書いてもらって貼るという使い方も期待しています。映像もきれいに映るので見せることもできますし、それ以外の使い方もあります。

6 まとめ

大型提示装置には一長一短があるという話をさせていただきました。選定ポイントでいうと、どのくらいの明るさで見えるのか、どういう機能があるのか、サイズがどのくらいなのか、費用等が挙げられます。映像の大きさと黒板との併用、順応性というところを重視したいのであればプロジェクターがいいのかなと思っております。また、板書と併用であれば意外と簡単に使えるということで、電子ペンとか電子黒板とか多機能な部分があると思うのですが、まずは映像を左右に振ったりというところから、アナログの板書と組み合わせる活用をしていただくのがいいかと思います。そして、慣れてきたら電子ペンを使ってデジタルで書いたりとかデジタルな画像を動かしたりとかという使い方と徐々に付き合っていくのがいいのかなと思います。

最後に、ちょっと見にくくなっていますが、弊社の企業理念の「最強の武器を提供する」というところで、プロジェクター、黒板といった、教室の前面に関連する製品を事業展開しておりますが、黒板メーカーでプロジェクターも展開している会社というのは日本では他にないと思ひまして、そういうところで継続的に先生方に役立っていければなという思いです。

ということで、お時間いただきましてありがとうございました。

【 日 本 史 分 科 会 】

研究発表

『 1 年間の実践から得たことと今年度のチャレンジ 』 ーキーワードは 『学び合い』 『GIGA』 『学びを楽しむ』 ー

発表者 青森県立三戸高等学校 赤 井 翔 太

7月下旬、全国歴史教育研究協議会第 64 回研究大会にオンライン参加した。その際、インターネット上のドライブを通して配付された参考資料の量に感銘を受けた。

昨年の研究紀要でも、私は発表スライド並びに配付資料を QR コードで見られるようにしていた。今年も、各 QR コードより、本研究をより理解していただくための資料を見られるようにした。少しでも参考になるものがあれば幸いである。



[発表スライド](#)



[配付資料](#)



[参考資料](#)

1 はじめに

新学習指導要領の段階的实施, および GIGA スクール構想により 1 人 1 台端末が配付され 2 年目となった。一部では「明治維新以来の教育改革」との言い方もされているが、この 1 年間で得た知見により自分の中でその意味がかすかながら見え始めたように感じている。本研究では、それを皆さんと共有し、私が行っている授業実践を紹介する。

2 この 1 年間で受けた刺激

①『TED 広める価値のあるアイデア』より「Grit」と「Growth Mindset」の考え方

『TED』で紹介されていた、アンジェラ・リー・ダックワース『成功のカギは、やり抜く力』（書籍『Grit やり抜く力』ダイヤモンド社）とキャロル・S・ドゥエック『「まだ」という力』（書籍『マインドセット ―「やればできる!」の研究』草思社）の考え方は、「才能」ではなく「やり抜く力」そして「結果」より「過程」が重要だと言うことを説いている。これらは新学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」の評価の考え方に大いに関連している。才能・生まれ持った力よりも、「Grit-やり抜く力」「Growth Mindset-成長思考」が重要であり、これらは後天的に身に付けることが可能であるとのことだ。それでは、高校での指導の大半を占める「教科指導」でそれを身に付けさせる工夫はできないかと思い至り、脳科学やメタ認知といった領域への関心を持つと考えるきっかけとなった。（詳細は、発表スライドや配付資料内の動画リンク、書籍を見ていただきたい）

②ICT を活用した秋田の教育力向上事業オンラインミーティング（令和 5 年 1 月開催）

このオンラインミーティングに参加し、アドバイザーである藤村 裕一氏（文部科学省 ICT 活用教育アドバイザー、鳴門教育大学大学院教授、教員養成 DX 推進機構長）の講演の中で、恥ずかしながら「GIGA スクール構想」の「GIGA」の意味を知ることとなった。GIGA はデータ容量の GIGA、ICT 端末を教育で活用するということではなく、「Global and Innovation Gateway for All」の略だということを知った。改めて、ICT 端末は手段であり、目的は「すべての人に向けたグローバル・革新への扉」を提供するための教育なのだということを認識させられた。

③Apple Distinguished School 視察（令和 5 年 1 月実施 聖徳学園中学・高等学校と東京成徳大学高等学校）

「GIGA」の意味を知ったあとに、Apple 社より「生徒の創造性、共同作業、分析的思考を引き出す革新的な取り組みを行っている」と認定された高校を視察した。ICT 機器を「使い倒す」教育活動は圧巻であったが、感銘を受けたのは同校教員たちの教育へのビジョンであった。「授業を変えなきゃ評価方法も変えられない」「従来の指導方法で新しい評価に対応しようとするから無理が生じる」という話とともに、生徒の学習・探究成果のアウトプット多様さを目の当たりにし、自分の教育観および指導方法を覆す必要性を痛感した。

④社会の変化 特に ChatGPT からの AI の話題

いまや教育業界で話題に事欠かない AI だが、昨年末の「ChatGPT」リリースによって生成 AI の現状を思い知らされることとなった。現在も次々とアップデートや新たな AI とその活用方法が編み出されていく中で、人工知能の賢さが人間を超え、シンギュラリティ（技術的特異点）に到達する日がそう遠くない（かもしれない）ことを意識せざるを得なくなった。私たち教員は生徒に対してどんな教育を施すべきなのか、変わるなら今なのかかもしれないと考えるようになった。

3 今年度のチャレンジ

この一年で得た知見をもとに、今年度の実践テーマを『学び合い』『GIGA』『学びを楽しむ』と打ち立て、『GIGA』つまり「Global and Innovation Gateway for All」の実現にどのように向き合うかを追究した。

（1）『学び合い』

『学び合い』とは、西川 純 先生（上越教育大学大学院 学校教育研究科教授）提唱の授業方法である。昨年の私の発表でも提案させていただいた。『学び合い』の導入自体の敷居は低いが、「成功」させるにはしっかりと西川先生の著書で理論を理解したうえでの導入をお薦めする。

奇しくも 2023 年 7 月 26 日・8 月 2 日に、Youtube『iTeachers ～教育 ICT の実践者たち～』チャンネルで『学び合い』が紹介されていた。『学び合い』自体には ICT 技術は全く必要ではない。しかし、先進事例を紹介するこのチャンネルにおいて『学び合い』が紹介されたのは、「GIGA スクール構想」の実現に寄与できるに値する指導方法だということではないかと考えている。



[iTeachers](#)

（『学び合い』を知るには、授業風景の動画を見ることが最も良い。本校の授業動画をここで『学び合い』実践例公開することはできないので、こちらのチャンネルを見てもらえるとイメージがつく。）

①『学び合い』導入における教育哲学

『学び合い』で目指すのは、教科内容の習得もさることながら、究極の目標は「誰も見捨てない社会（クラス）」「最大の成果を出せる集団」をつくるにはどうするか、を習得することにある。

AI にはできない「コミュニケーション」「他者への配慮」これこそが卒業後にどんな道に進んでも生きるスキルであると考えます。『学び合い』で願うことは「将来の生徒の幸福」である。能力のある者が活躍する、だけで社会が成り立っているわけではない。能力が低くても、「他者に聞くこと」が「集団への貢献」となり、全員で、多様な視点で目標達成へ向かうからこそ、「革新」は起こりえるのではないか。その哲学を持って、この『学び合い』に1年次の歴史総合に取り組んでいる。

②『学び合い』に取り入れたこと（発表スライド、参考資料を見ることを推奨する）

『学び合い』の教材づくりにおいて、学習指導要領の記載そのものを活用している。学習指導要領には、「生徒が身に付けること」が書かれているため、それを試験範囲として直接生徒へ示し、定期考査とは別に単元ごとのレポートを書かせた。また、学習指導要領の歴史総合・日本史探究において、各時代の中項目（1）では、思考力・判断力・表現力を身に付けるために「問いを表現」することを求めている。したがって、単元の最初に教科書の資料をもとに時代を通観する問いを表現する活動を取り入れた。

レポートや、問いの表現の活動の際、「Google フォーム」と「Google スプレッドシート」を活用することにより、生徒が表現したレポートや問い、毎時間の振り返りも含め、生徒が表現したことをお互いに見られるように設定している。学習指導要領解説で「歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点である」とあるが、その問いもそれぞれの生徒の視点から見ることで多角的・多面的なものが生まれる。そして、『学び合い』とレポートでは、資料をもとに多面的・多角的に考察された仮説が表現されてくる。それらが『学び合い』の中ではリアルタイムで共有され、ICTをとおして事後の振り返りや単元のレポートが共有されることにより、生徒は多種多様な価値観に触れることとなる。それらを認め合い、そして受け入れることで、よりよい社会のあり方が模索されていくと考えている。

(2) 評価方法

「主体的に学習に取り組む態度」の評価として注目したのが「Quizlet」と「Google フォーム」である。

「Quizlet」は一問一答もしくは単語カードを作成して、それをインターネット上に公開までできるサービスである。アプリ・ブラウザ両方で使用可能である。「Quizlet」で問題を作成して考查範囲にQRコードを付けて配信し、考查での得点率で学習に取り組む態度を類推できる。



[Quizlet](#)

赤井のアカウント

「Google フォーム」は、誰が何回そのフォームに取り組んだかを直接把握できる。考查での得点率とセットで、学習に取り組む態度の評価が可能だと考えられる。

重要なのは、結果だけではなくその過程も見ているということ、そして結果を出す方法にはどんなものがあるのかというメッセージを生徒に発信することである。考查の点数と、考查後の振り返り（Google フォームと Quizlet 取組状況）を比較することで、データに基づいて結果を出す人は過程をきちんと経ているという論拠、過程をきちんとやれば結果は残せるという経験を生徒に示すことができる。

Grit と Growth Mindset を学ぶ過程で、私は「才能・結果中心の価値観」の危険を知った。自分には才能があると驕り高ぶり周りを見下す、壁に打ち当たれば才能がないと諦める、才能がないことを認めたくないから挑戦しない、という「才能・結果中心の価値観」ではなく、努力するものを尊敬し、過程を踏み挑戦する心を忘れない「Grit」「Growth Mindset」を生徒に身に付けてほしいという願いが、この実践の教育哲学になっている。

(3) 『多様なアウトプット機会』『自宅での授業の再現性向上』授業記録作成と公開

AI の台頭と『個別最適化学び』の追究から実践として取り組んだのは、生徒が学習内容についてアウトプットする方法を多様化させる試みである。AI によって、メディアリテラシーには気を付ける必要があるものの「情報収集」においては今後どんどん省力化されることになると考えられる。しかし、AI が苦勞しているのは「相手に的確に伝える方法」と「深い分析による仮説」である。したがって、私の授業では、できる限り「教え込む」授業の時間を減らし、アウトプットの機会を増やすように努めている。アウトプットも、単に一問一答や試験問題を用いてのものではない。プレゼンテーションや思考ツール、ICTを用いた共同編集のことを指す。

「教え込む」授業の時間を減らす試みとして、「Notion」というサービスを用いた授業記録を作成し、それを生徒に公開している。

「Notion」はPDF資料や動画の埋め込み、参考となるHPのURLも入れ込むことが可能なサービスであるため、生徒はその授業記録を見ることで、自宅で授業の再現が可能となる。となると、全てを授業で伝えることも必要なくなるため、「Notionの授業記録を見ておいて」で済むことも増えることとなる。



Notion



[授業記録](#)

そして生まれた時間で、生徒にプレゼンテーションを作成させたり、思考ツールによる分析をさせたりする。ICTを用いたプレゼンテーションやノート・資料の作成方法は日々新たなツールが開発されて進化しており、それらに生徒が触れる機会を設け、自ら使いやすいツールを活用することで、卒業後も活きる「自ら学習し、まとめ表現するスキル」を身に付けることとなる。



[少子化要因プレゼン・分析](#)

4 終わりに

ここまで私の拙い作文を読んでくださった方々に敬意を表する。そして、ここまで時間と労力と時間を割いていただけなのであれば、ぜひこの研究紀要のQRコード、ならびに配付資料中のQRコードの資料にも目を通していただきたい。私のこれまでの実践・具体例があるので時間・労力の無駄になることは避けられると考える。

「Global and Innovation Gateway for All」の実現に向け、私自身も「Grit」「Growth Mindset」をもって探究・実践を続けていく。

『 「差別」について考える—歴史的事象を自分事として捉えるための試み 』

発表者 青森県立五所川原農林高等学校 嶋津 佑希

1 はじめに

私が今回「差別」というテーマに取り組もうと考えた理由は、元々個人的に興味があるテーマであるというものがあるが、昨今の歴史教育において過去と現在との繋がりを重視することが求められていると感じるためである。現代社会において「多様性」という言葉は普遍的に用いられるようになった。その一方、少数派や立場の弱いものへの「差別」に関わる問題が顕在化し、それらに関わる問題は連日ニュースで報道されている。そのため生徒にとっても身近に捉えやすい問題であると考えた。故に、今回の発表では生徒にとっても身近な問題である「差別」をテーマにすることで、生徒が歴史的事象を自分事として捉え、主体的な探究活動へと繋げる授業を作ることができるのではないかという仮説を立て、今回の発表のテーマとした。

2 生徒へのアンケート

まずは、生徒が差別に対してどんな考えを持っているのかを知るために、簡単なアンケートを実施することにした。項目は、①生徒が「差別」をどのような行為であると認識しているか、②どんなことをされたときに差別されたと感じるか、③現代において解消に努めなければならない差別は何か（選択制。人種差別、階級差別、性による差別、障害に対する差別などを項目として用意）、④③の選択肢を選んだ理由、の4項目とした。勤務校で私が授業を受け持つ生徒に協力してもらい、3クラス68名の回答を得ることができた。その分析は以下の通りである。

- ・①の質問の回答は、「自分と違うと思った人に対し平等な扱いをしないこと」「人と比較して、自分とは違う人をいじめること、仲間はずれにすること」「大多数で少数をいじめること」などが多かった。このことから、生徒たちの「差別」に関する認識は世間的なものとのずれはあまりないことがわかった。
- ・②の質問に関しては、「自分だけが他と違う扱いをされたとき」「〇〇だから△△といったレッテル貼りをされたとき」「男だけがきつい仕事をさせられる、髪の長さを注意されるなど、男女の扱いが違ったとき」などの回答が多かった。あると予想していた「大人と子どもの違い」について言及した回答はなかったことから、生徒たちは「同じカテゴリー（同じクラス、生徒、家族）に属する人が平等に扱われないこと」に対し、差別を感じていることが多いということがわかった。
- ・③の質問に関しては、「人種・民族・宗教・文化に関する差別」を一番解消すべきと考えている生徒が38人と、過半数を占めており、その中でも「黒人差別」について言及しているものが半数を占めていた。
- ・④の理由に関しては、どの選択肢を選んだ生徒も「ニュースで見たから」「同じ人間なのにおかしいから」という理由を挙げた人が多数であったが、「黒人差別」に関しては「肌の色が違うだけで差別される意味がわからない、理由がわからないから」という回答が複数見られた。質問②で大人と子どもの違いに言及がなかったことなどから類推されるように、生徒たちはある程度理由がある差別は区別の1つとして納得している節があるので、「理由がわからない」黒人差別を最も解消すべき問題と考えたのではないかと予想される。

このアンケートを配布したときに、生徒からは「内容が重い」「難しい」という声がちらほら聞こえた。しかしながら、記述の質問であっても白紙で提出した生徒は全くいなかった。なかでも質問④については、自分の体験と絡めて思いを綴った生徒や、怒りをにじませながら差別はおかしいという思いをぶつけていた生徒もいた。時間いっぱいまで悩み、授業が終わってから職員室に提出に来た生徒もいた。このことから、このアンケートで複数の生徒から挙げた「なぜ肌の色が違うだけで黒人が差別されるのか」という疑問は、生徒から自発的に出された「問い」として捉えることができる。アンケートの結果を踏まえて、私は「なぜ黒人差別が生まれたのか」を調べ、そのことに関して生徒が探究できる教材作りに取り組むことにした。

3 教材案

歴史の研究は、先行研究の調査から始めるのが基本である。故に黒人差別の研究をしている日本人研究者の著作物や、日本語に翻訳されている海外の研究者の著作物にいくつか目を通したところ、以下のようなことがわかった。

- ・人種の分類は 18 世紀頃のヨーロッパで始まる。理由としては、この時代は奴隷貿易が活発化し、大量の黒人がアメリカ大陸に輸送される時代であり、そうした非人道的な奴隷制の是非を論じるために、人間の優劣について規定する必要があったためである。「優劣を付ける」ことが前提となっているので、「美しさ」という、非常に主観的な理由付けによって、白人＝文明的で優れた人種に対し、黒人＝野蛮で劣等な人種という規定ができあがった。当時の啓蒙思想家たちの発言を見ると、多かれ少なかれ黒人が「劣った人種」であるという考えが当時の人々に共有され、受け入れられていたことがわかる。

- ・実際に黒人奴隷を使役していたアメリカの植民地や、フランス領サン＝ドマング（のちのハイチ共和国）でも、「黒人が劣等な人種」であることが前提になっており、「ブラック・コード」などの、黒人に規制や制限を設ける法令を制定することに対する正当化の根拠となっていたことがわかる。

- ・19 世紀のヨーロッパでは、これらの恣意的な分類に「科学」による根拠付けがなされた。しかし、観察と数値化に基づいた科学的手法を用いた分析であっても、「白人が優性、黒人が劣性」という結果ありきの分析でしかなかった。しかしこれらは多くの人々に受け入れられた。この時期にヨーロッパ各地で行われ、メディアによって広く喧伝された「人間展示」などを通して、多くの民衆が黒人の姿を実際に見ることで自分たちとの差異を比較し、自分たちの優位性を確認するために利用されたためだと考えられる。

- ・19 世紀後半の南北戦争後のアメリカ合衆国では、それらの論理が黒人に対する規制の根拠になっていく。戦争直後は黒人に自由や平等が認められたものの、自由黒人と白人貧困労働者層の結びつきを恐れた産業資本家やかつての地主たちが、ヨーロッパで広められた「黒人は劣等な人種」であるという論理を使い、黒人に対する様々な法規制を制定していった。結果、19 世紀末には「分離すれども平等」という極めて人種差別的な考え方がアメリカ合衆国の公共政策の指針となり、国中に広まっていくことになった。ヨーロッパの国々と違い、多くの黒人が身近に暮らすアメリカ合衆国では、「異質」な黒人が自分たちと同じ「市民」になることへの恐怖感が、このような動きを助長したのではないかと推測される。

- ・人間集団を何らかの基準で分類し、自らと異なる集団の人々に対して差別的感情を持つという「人種主義」はそれぞれの時代で裏付けとなる思想や制度や科学に支えられているものである。当時の人々の差別的な目線を問い直すのではなく、そうした目線を生み出した時代背景に着目することこそが現在の歴史を問い直す意味でも大切と考える。

これらの研究を踏まえたうえで、この発表の目標である「生徒に歴史的事象を自分事として捉えるための授業」をするために、私は 2 つの教材案を提案したい。

①トマス・ジェファソン「ヴァージニア覚書」を読んで、あなたはジェファソンをどのような人物だと評価するか

- ・先行研究から、18 世紀の啓蒙思想家の発言の中に「黒人に対する当時の人々の目線」を読み取ることができるということがわかった。そのことを踏まえて、生徒にとっても聞きなじみのある人物であろう「トマス・ジェファソン」とその著作である「ヴァージニア覚書」をとりあげ、彼の発言の中から当時の黒人に対する目線を読み取る作業を実践させてみたい。

- ・ジェファソンは、「独立宣言の起草者」でありながらも「奴隷所有者」であり、「所有する黒人奴隷を借金返済のために売りに出す」一方、「黒人奴隷との間に子をなし、自分の死後も彼女と子どもの生活を保証させることを命じた遺言を残している」など、一見矛盾した、しかしながら現代の価値観で鑑みても「普通の人間」らしいエピソードを持つ人物である。生徒からも多様な意見が出ることが期待できると考える。

- ・共通テストの問題を鑑みても、昨今は「資料から内容を読み取る」という作業が重視されつつある。このことから、授業内で生徒に「資料の読解」に慣れさせることが必要だと思われる。故に、比較的日本語訳や先行研究が多く、読みやすい内容である「ヴァージニア覚書」が適していると考えた。

②南北戦争後のアメリカで、黒人差別をなくするための法案を作成してみよう

- ・19 世紀後半、南北戦争終結後のアメリカで、当初は黒人の自由を保障するような動きが起こっていたにもかかわ

らず、それらに反動するような動きが起こり、それが定着していったという歴史を踏まえ、どのような法案であれば当時の人々が「黒人の自由」を認められるかを生徒に考えさせたい。

・このテーマでぜひとも挑戦したいのが「Chat GPT」の利用である。単純に調べるための作業に使用することもできるが、私が実践させたいのは「生徒が考えた法案は、当時の社会で通用するものかをA Iに訪ねる」というものだ。おそらく生徒が望む答えは返ってこないことが予想される。A Iは、分析や要約、まとめといった作業は得意だが、一から答えを作り出すという作業は苦手という特性がある。何度か質問を繰り返さないと望む答えは得られないことが多く、計算問題のようにすぐに答えが導き出せるツールではない。逆に言えば、自分が望む答えを導き出すためにA Iに対して効果的な質問ができれば、自分の考えをまとめるための「対話」を行うことができる強力なツールになり得る。正しいA Iの使い方を授業の中で学ぶことも現代社会を生き抜く力を鍛えるためにも大切だと考えるため、ぜひ授業内の活動で実践したいと考える。

4 おわりに

今回の発表では、残念ながら授業の実践というところまで達成することはできなかった。しかしながら、今回の発表の内容をさらに精選し、3学期の歴史総合の授業で実践することを検討中である。アンケートの男女比の偏りや、1920～30年代のアボリショニストの活動や黒人奴隷蜂起の持つ暴力性に触れることができなかったことなど、反省点も多々あるが、発表後に多くの先生から質問や感想、アドバイスをいただいたことは私にとって貴重な経験となった。今回の発表の機会を頂けたことに対し、改めて感謝を申し上げますとともに、今後も授業の質を向上させていけるよう、研鑽に努めたい所存である。

<参考文献>

平野千果子『人種主義の歴史』 岩波新書

本田創造『アメリカ黒人の歴史』 岩波新書

宮津多美子『人種・ジェンダーから見るアメリカ史 丘の上の超大国の500年』 明石書店

浜忠雄『カリブからの問い』 岩波書店

小川幸司『世界史とは何か―「歴史実践」のために』 岩波書店

橋本康弘・宮本英征『つまづきから授業を変える 高校歴史「PDCA」授業&評価プラン』 明治図書

【 地 理 分 科 会 】

研究発表

『 私の授業実践（とくに地形図と日本地誌） 』

発表者 青森県立青森高等学校 川崎 淳平

1 はじめに

本校勤務10年目となり、昨年度までは主に2～3年生の地理Bを担当してきた。今年度は2年生の学校設定科目である「地理概論」を2単位3クラス、1年生の「地理総合」を2単位6クラス担当している。地理Bの地形図や日本地誌の単元でも、旅先の写真や体験談をどんどん取り入れ、生徒がその地域をイメージしやすいような工夫を図ってはきたが、今年4月によりよく自分にもiPadが支給されたことで、授業内でのICTの活用場面が飛躍的に増加した。このため、地理総合の導入部にあたる大項目A「地図や地理情報システムで捉える現代世界」では、生徒と共にまずは自分も慣れる、使ってみるといった感覚で、jSTAT MAP等のGISツールを授業内で紹介し、操作した。今までの教師主導で板書中心の授業スタイルから、生徒同士が自由に対話しながら主体的に操作し学ぶといった場面が増え、生徒個々のGISに関する知識・技能は多少なりとも高まったと思う。ただ「多面的・多角的に考察・表現することで、思考力・判断力・表現力を身に付けさせる」といった本大項目にあるもう一つの目標に配慮した学習場面は少なかった。

2 趣味を授業に活かす

3年半前から趣味で始めた「みちのく潮風トレイル」も、当初は紙物のルートマップを見ながら歩いていたが、ここ2年間は自身もグーグルマップを利用している。旅の様子は、適宜授業で生徒達にも紹介してきたが、三陸沿岸の地形や産業、被災地の現状等を題材に、何か授業はできないものかと歩きながら常々考えていた。

本州最東端の鮎々崎（とどがさき）に最も近い宮古市姉吉地区は、谷間に立地する10数戸程度の小集落である。明治29年と昭和8年の三陸大津波で2度集落が全滅しており、その経験から、海岸から900mほど内陸に入った標高50～60m付近の谷間に集落が再建された。また、集落の最下部、標高50m付近には「此处より下に家を建てるな」という津波の教訓を刻んだ大津波記念碑が建立されている。2011年の東日本大震災では、津波がこの大津波記念碑の50m手前、標高40m付近にまで差し迫り、漁船や漁港施設はすべて流された一方で集落全体は津波の被害から免れた。この姉吉地区と大津波記念碑を題材に、①資料の読み取り（宮古市の津波高と大津波警報の発令時系列を考察）、②ICTの活用（地理院地図の3D機能）、③津波の性質の理解の3点を軸に、生徒の防災意識を高めながら、思考力・判断力・表現力に資するような模擬授業を計画・実施した。（時間は約30分、A4両面印刷のプリント資料1枚、生徒全員iPad使用）

3 模擬授業の内容

①資料の読み取り（津波高と大津波警報の発令時系列の比較）

気象庁の観測データが残っている宮古市街地の津波観測値と大津波警報等の発表状況の推移を時系列順に並べたところ、いくつかの疑問点が見えてきた。一つ目は、地震発生3分後の14時49分に3mの大津波警報が出されている点、二つ目は15時26分に8.5mの津波を観測していながら、15時30分に10mの大津波警報が発令されている点である。二つ目については遅きに失した警報であることは誰にでも読み取れるが、一つ目については情報の鵜呑みや過信で避難の遅れを誘発する可能性が含まれている。実際、震災後に開かれた気象庁の有識者会議でも、3mという数字に安堵し避難が遅れたケースが指摘されている。これらのデータから、姉吉から近い宮古市の津波高を確認しつつ、数字に隠された危険性や人々の心理についても4～5人のグループで考察させた。

②ICTの活用（地理院地図の3D機能）

事前に姉吉地区の地形図を地理院地図で確認はさせたものの、同じ宮古でも市街地と姉吉地区とで津波の高さが全く違った理由を、初めから説明できる生徒はいなかった。このため地理院地図の3D機能を利用し、姉吉地区周辺の立体図を生徒個々に作成させた。姉吉地区の観測データは残っていないが、津波は海岸から続く勾配7%程度の狭い谷を駆け上がり、標高40m付近にまで達している。地形を立体化させたことに加え、津波の周期は数十分に及び、なかなか引き波が始まらないことを補足した結果、生徒達は津波が谷を駆け上がってきたことを理解することができた。

③津波の性質の理解

生徒達は、谷やリアス海岸の湾口が狭い場合、津波が収斂し高さが増すこと、そして前述したように津波の周期は長く、一度波が押し寄せるとなかなか引き波が始まらないこと、津波は地形によっては遡上してくること等をプリントの感想欄に記述していた。また、大津波警報の波高を鵜呑みにしてはいけない、という感想を記述する生徒も見られ、とにかく短時間で高台へ避難し、避難したら決して戻らないという津波の鉄則を確認した。

4 おわりに

地形や地形図の学習においては、生徒の理解を促すため自分で撮り貯めてきた写真等を使って授業を展開してきたが、ICTの活用は、生徒の地理に対する興味関心の高まりや深い理解につながることを、今回の模擬授業の実践を通して実感することができた。さらに、地理院地図で地形図を立体化したり、Google のストリートビューで実際の様子を観察したりすることは、あたかも現地にいるかのような感覚を生み、読図が苦手な生徒の手助けにもなる。このような「土地感覚」を養うことは、その地域の土地利用や産業といった経済面、長い時を経て醸成された伝統的な風習や生活様式といった文化面、ひいては地域の抱える課題等、生徒が総合的に地域を捉えるための足掛かりとなる。生徒がリアリティを持って地形や地形図の学習に取り組めるよう、また、デジタルの良い所、アナログの良い所、それぞれの長所を活かしながら、生徒が主体的に学習できるような授業構築を今後も続けていきたい。

【 公 民 分 科 会 】

研究発表

「コンテンツとしての授業とカリマネと風呂敷のような公民」

発表者 青森県立三本木高等学校 氣 仙 祐 禎

1 はじめに

1992年、当時の日本の放送局日本テレビが在京キー局中視聴率1位のフジテレビから視聴率を奪取すべく、社長の大号令の下、当時30代の若手社員十数人が、フジテレビのある2週間分（24時間×14日＝336時間）の放送番組をすべて録画し、その視聴率と番組の構成や微細な特徴を詳細に大型模造紙に書き入れ、ベテラン社員も加わり徹底的に研究・検証し、その結果の分析を踏まえ、独自のスタイルの番組と演出法を幾つもつくり、結果的に1994年に視聴率三冠王を獲りそれから10年続いたことがある。

私がこのことを知ったのは、2017年だったが、子どもの頃からテレビ番組が好きで、小学生の頃はテレビ局の社員になりたいと思っていて、現在教師という職に就いている私は、これを知って、「これは、ほとんど、カリキュラムマネジメントと同じではないか」と直感的に思った（本当は、全く同じとは言いがたいのではあるが）。「学校現場での大局的なグランドデザインと目標としてのスクールミッションと手立てとしてのスクールポリシーの実践やその具現化でもある教育課題への取り組みに向かう、キャリアや力量も様々な各種年齢層の教師が試行錯誤しながらもチームとなって共有する教育課題を克服する過程で、各々が成長し、それが組織を支える人材としても組織自身に還元されて、さらなる取り組みに向かうサイクルを築き上げる、という、学校現場で起きていること」に実に似ている。

また、カリキュラムマネジメントが、教科等横断的な視点をもとに、複数の領域を融合し新たな価値やものを生み出すこと通じる面をもつことは、地歴公民科、とりわけ公民科に顕著で、カリキュラムマネジメントと公民科目には共通性を見いだすことができる。

本稿では、私自身のこれまでの授業の実践の一部を題材として、テレビ番組のようなコンテンツとしての授業を考え、それを効果的に配置するカリキュラムマネジメントと、たくさんの要素と結節・包摂し柔軟にその形態を変化させる風呂敷のような懐の公民科の特性に触れて、考察する機会としたい。

2 カリキュラムマネジメント

※以下は、『カリキュラム・マネジメント研修』の概要と、概要のまとめ（研修終了段階で受講者がレポートを作成）の転載となる。

- ・受講方式：オンライン
- ・実施主体：独立行政法人教職員支援機構（N I T S）
- ・受講日程 令和4年12月1日～28日（断続3日間）
- ・講義テーマ

「生きる力」の理念の具体化とカリキュラムマネジメント
学校現場におけるカリキュラムマネジメントの意義
カリキュラム評価の重要性とマネジメントサイクル
カリキュラム実践のための組織化
カリキュラム改善に必要な条件
カリキュラムマネジメントと教師の専門性
カリキュラムマネジメントの可能性と課題
総合的な学習の時間とカリキュラムマネジメント

（1）カリキュラムマネジメントとは

① カリキュラムマネジメントの根幹

「変化する社会での問題を主体的に考え解決する資質や能力としての確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」の養成を目指し、学校全体で取り組む経営活動としての教育目標と教育課程の編成を土台に、教科等の指導と教育課程の充実のため、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立て、教育課程の実施状況を評価し、人的又は物的な体制を確保し改善を図ることがカリキュラムマネジメントの根幹である。その実現のために、学年や教科の指導計画としての各組織単位の経営活動が行われ、個々の授業や教育活動としての教職員の個業としての活動が下支えする。

② カリキュラムマネジメントがなぜ必要なのか

一定の教育水準を保障する公教育としての学校教育は、国（文部省・文部科学省）の下で教育行政として行われ、教育課程は、学校を基盤として編成されてきたが、組織マネジメントの発想からカリキュラムマネジメントの考え方に至った。社会や世界の状況を視野に入れ、求められる資質・能力とは何かを明確化しつつ柔軟にアレンジしたカスタマイズとしての「社会に開かれた教育課程」とともに「個別最適かつ協働的な学び」の実現と個々の学校のスクールポリシーを起点にした教育課程の整備と、各教科の内容と教育課程全体とを、学校経営・学年経営・学級経営との往還を図り、必要なリソース・資源を再配分することに全ての教職員が参加・参画することが必須となる。

③ 教育課程（カリキュラム）

ここでいう教育課程（カリキュラム）とは、学校教育の目的や目標を達成するために、総合的に組織した学校の教育計画で、「教育理念・育てたい資質・能力」、「組織配列した教育内容（各教科等の指導計画）」、「担当した授業時数」、「教材・教具・施設・設備」という「教育をする側にあるもの」をいうが、これらを具現化・顕在化したもので、学校の“生命線”である授業の中心に児童生徒がいて学んでいるとき、「カリキュラム」とは、「子どもの学習経験」「子どもの学びの履歴」としての「児童生徒の学びの総体」ということができ、それは学んだ側にあるものでもある。

（2）カリキュラムマネジメントをどのように進めるか（評価と組織化）

① PDCAサイクル

授業を中心としたPDCAサイクルは、「学校教育目標・グランドデザイン→教育課程の編成→各教科等の年間指導計画→授業の指導案の作成→授業の展開→授業の評価→単元の評価・改善→指導計画の評価・改善→教育課程の評価→学校評価→改善への取り組み→次期の目標・計画の作成」の流れとなる。それは、コンピテンシー（資質・能力）を育てる学校が、新指導要領を手がかりとして独自にカリキュラムマネジメントに取り組むことに通じる。

② 組織化と推進する力

その実践の上では、専門性を持ち得る教職員内の組織化とそれに携わる人・主体（教員個人、学年集団、学校、市町村、教育事務所、都道府県、国家）、立場（校長、教頭、ミドルリーダー、教務主任、学年主任、各主任、リーダーやそのリーダーシップ、教職員のチームワーク）で理念が共有され主体的・自律的な組織による流動的・弾力的な実践がなされることが肝要である。

③ カリキュラムマネジメントの軸

STEAM教育に例示されるような、教科等の横断など、特定の分野・内容や枠にとどまらず資質・能力（コンピテンシー）を養い、その教育資源を学校内外にも求める取り組みは、カリキュラムマネジメントの軸となる『総合的な学習の時間』『総合的な探究の時間』の体現でもあり、特別活動や道徳を含んだ教育課程の中心に据えることができる。

3 授業の一般的過程と教授内容 ※2006年作成 十年研レポートより 転載

(1) はじめに

2005年3月のことであるが、あるラジオ番組で、パンについて取り上げていた。日本のパンの歴史や特徴、小麦の栽培や水に由来する欧米でのパンの違い、その他のパンの例などが主な内容であったが、地歴公民科で扱われる分野とその内容との関連性で考えると、歴史や地理、そして文化的な事柄が扱われており、それらは「パン」という媒体を通して一体性をもって実に上手く伝えられていたようにみえる。私は、その放送直後、「これは我々教師のやるべきことだったのではないのか」と率直に思った。

私たち教師は、基本的には「知識と概念の教授」を授業を通して実践しているが、生徒の今後においては、それらを一体化してとらえ活用する機会が決して少なくない。高校段階での学習活動には、それらを考慮した上での道筋を示すことも必要なのではないかと、私自身、この数年よく思う。

(2) 「パン」の話

そのラジオ番組での放送内容について、もう少し触れてみたい（以下はホームページからの引用要約である）。FM東京（TOKYO FM）の『サントリー サタデー・ウェイティングバー アヴァンティ』2005年3月26日放送分（19:00～19:54）からの内容である。バー「アヴァンティ」に来る客と常連との会話という設定で番組は進行する。

①日本のパン（「パンの会」主宰 渡邊政子氏）

日本のパンはアメリカのパンである。アメリカのパンとヨーロッパのパンは違う。アメリカのパンは食パンで、ワンダーブレッドと呼ばれている。日本でパンが普及したのは、戦後、アメリカの小麦を売り込む政策に端を発しており、食パンやコッペパンから普及した。日本の菓子パンなどの甘いパンや、中に何かを包むスタイルのパンなどはあまりないようである。

パンが日本に伝わったのは鉄砲と同時で、種子島に着いたヨーロッパ人が伝えた。日本が鎖国していた時代は長崎の出島でのみ作られた。後に横浜が開港したときに外国人向けにパンが作られた。その横浜で最初に作られたパンはフランスパンだったが、それは当時の幕府がフランス寄りだったため。その後、政府がイギリス寄りになりイギリスパンが中心となった。そして戦後はアメリカ。

②フランスパンとバゲット

日本でフランスパンと呼ばれてきたパンは、パリで食べられているバゲットとは違うもの。フランス小麦の輸入が認められていなかった時代に、アメリカやカナダの小麦のブレンドによりフランス小麦に近いものを作り、それで開発されたのが40年ほど前の日本のフランスパンであった。

フランスの小麦と比較して、アメリカやカナダの小麦の方が良質とされている。この質とはタンパク質の量のことで、多いほど張りのあるパン生地が作れる。従って、パンの形態・形状は小麦に左右される。ただ、アメリカやカナダの小麦は風味が弱い。また、パンのおいしさが持続する時間は、湿度に関係する。湿度の高い日本はパンの老化が早い。

③スイスのパン

パンの素材は自国の小麦、牛乳、卵を使用しており、味も良い。最大の特徴は水だが、水が非常に硬いので、同じ小麦粉で日本でパンを作っても、スイスと同じパンにはならない。スイスパンを日本で作ろうと思っても、原材料の輸入が自由に出来ないのでは、手に入らないものが出てくる。

④インドのパン”ナン”

ナンは釜がないと作れないので、店で食べるものとされている。

放送で扱われたものは実に豊富な内容である。食文化としてのパンとそのスタイル（食感、味、風味）、日本史におけるパンの歴史、幕府や政府と欧米との関係、小麦や水とパンの関係、湿度など気候との関係、原材料についての輸出入のこと、など盛りだくさんである。しかも、54分（コマーシャル等を入れると実質50分を切る）の中に、これだけの内容を順序立てた構成に盛り込んでいるところなどは、その内容の見事さと共に、参考にしなければならないと思わせるものがある。

（3）科目横断

さて、冒頭にも述べたが、このような「受け手に対する濃い内容の提供」は、少なくとも私は地歴公民科教師の責務の一つではないかと思っている。地歴公民科が未だに「社会科」といわれることが少なくないのは、以前の社会科の呼称の名残であると同時に、それはやはり「社会」をとらえる教科・科目として機能しているからであろう。科目を横断して内容の融合をはかることは、それ自体意義のあることだといえる。

では、その実現のためにはどうすればよいのだろうか。そのためには、三つの考察点があると思われる。

第一に、科目横断のための媒質をどうするか、である。今回のパンの話は、地歴公民科の科目との関連性と、その要素の大小問わず考えると、日本史、世界史、地理、現代社会、政治・経済と地歴公民分野の科目のほとんどが該当する。その複数科目の媒質、媒体として「パン」があるが、統一的なテーマを事前に科目間で打ち合わせて、設定しておけばよいのではないか（とはいえ、そう簡単な話でもないのであるが）。但し、そのためには科目内容を教科全体で俯瞰したうえで整理して、「教科」としての扱いや方向性がシステマティックに構築されていることが望ましい。

第二に、科目横断を貫く理由をどうとらえるか、である。複数科目にまたがる内容を横断することがなぜ必要なのか。そもそも世の中の事象は、当然のことながら、多くの要素を多分に含んでいて、私たちはそれを「それ」として総合的かつ重層的に半ば瞬間的にとらえるか、その一側面にスポットをあてて限定的かつ拡大的にとらえるかのどちらかではないかと思う。しかし、それらはいずれもある種、捨象されて認識され、本質のみが残るが、その一方で、複数要素を組み合わせるがゆえに「実像」が質感を伴って見えてくる場合もある。複数要素の組み合わせのダイナミズムにも似た相乗効果がみえる。私が、科目横断に関心があるのはそのためである。「パンの話」であれば、複数要素によってパンが説明されているがゆえに、単にパンのいろいろなことが分かった、という段階に留まらず、私たち食文化をもつ人間にとってのパンがある種の存在感を持って迫ってくるのである。

第三に、しかしその実現のためには地歴公民科内での科目横断か、地歴公民科以外の授業で実現するか、の判断をどうするかである。結局のところ、それは総合学習の役割ではないかと指摘されるかもしれないが、今回のパンのケースは、家庭的な内容ともいえるが、地歴公民科の範疇に収まるもので、可能であれば地歴公民科での扱いが望ましいのではないだろうか。つまり、総合学習という手段に頼らないことも大切なのではなか、ということである。

ところで、地歴公民科の授業を通して、結果として科目横断の効果を狙うとしても、科目横断的な内容が前提とされる状況下での授業をどのように考えればよいだろうか。「パンの話」では、日世地現政で共通の題材として取り上げるという前提があれば、1コマの授業のいずれかの段階で扱うことになり、複数科目での「パン」が、生徒の段階で一定の形に結晶される。

（4）授業の一般的過程

その授業の一般的過程は今後どのような形態をとるのだろうか。ここでの一般的過程とは、「導入」「展開」「まとめ」といった従来オーソドックスとされたスタイルのことであるが、私見では、今後もオーソドックスな授業スタイルとして踏襲されていくのではないかと思われる。例えば、小論文の構成においても序論、本論、結論という構造がよしとされているように、授業の構成も同様ではないかと思うからである。

授業の「導入」については、マスメディア（テレビ等）の番組構成などが大いに参考になる。何らかの「情報」を提供して一定の充足感を与えるテレビ番組やラジオ番組にしても、やはりそれ相応の構成をもっている。手法には様々あるが、例えば番組冒頭にクイズを実施する場合や、その日の番組内容のダイジェストを見せたりと、まず最初の段階で「つかむ」工夫がよくみられる。今では、番組自体でも「〇時またぎ」という呼称を使用したり、番組によってはそのコーナーをつくっている場合もあるが、放送局としては、時間の変わり目に他局他番組にチャンネルを変えられないようにす

る試みも多い。従って、番組冒頭の「入り」が極めて重要であるが、それは授業も同様である。

そして、授業の「まとめ」である。勿論、それはその時間（コマ）内のまとめであるが、そこには次時予告も含まれる場合が少なくない。例えば高視聴率ドラマは、その回の内容が当然のことながら視聴率の高さに反映されるが、実は前週（前回）の「流れ」は次週（次回）高視聴率の半分ほどの要素を占めるという指摘もある。つまり、ドラマの内容とその週（回）の終わり方に大きく影響を受けているのだ。この「導入」と「展開」の効用だけ考えてみても、授業の一般的過程はそのスタイルに乗っ取ること自体、意義のあることといえる。

また、「インターネット大学」の類が、今後普及してきて、全ての講義や教授活動をインターネットで行う形態が一般化すれば、その環境で接する「講義」「授業」においては、やはり一定の様式が必要になってくる。テレビ番組に一定の様式があるように。

（５）授業スタイルの今後

では、今後、授業のスタイルにどのような変化があるのだろうか。教授内容には一定性があり（指導要領が存在するため当然である。指導要領は遵守されなければならない）、授業の構造も「導入・展開・まとめの一般的過程」に基づく状況下においてである。ドラマであれば、脚本とキャスティングが決まっている状況で、他にどれ程の施しようがあるのか、と問われているようなものである（但し、ドラマは脚本で決まる、という見方もある）。

しかし、ドラマの世界ではこの１０年で進化した要素がある。「演出」である。例えば、テレビシリーズが好評で映画も複数本作られたフジテレビの『踊る大捜査線』は、画面に多くの情報を盛り込むことが一つの特徴であった。ウェブサイト『MOURA「白い巨塔総研」』によると、同じくフジテレビの『白い巨塔』（２００３～２００４年版）は、最終話直前の１９、２０話において従来のドラマの「常識」ではみられない終わり方をしている。ドラマではないが、テレビ朝日の『朝まで生テレビ』では、それまでの報道番組ではみられない出演者のアップを多用し、表情から視聴者に訴える演出をしている。

このように考えると、私たちの授業においても、「演出」としての何らかの可能性は切り開かれるかもしれない。

例えば視聴覚教材について考える。かつてテレビ朝日『ニュースステーション』では、１９８５年の日航機墜落事故を取り扱った際、その惨状を伝えるために、スタジオに機内を再現し、搭乗者が履いていたと思われる靴全員分をスタジオに並べた。視覚や聴覚に訴えかけることが視聴覚教材を使用することの目的だとすれば、このような発想と表現力を支援するツールや環境自体が視聴覚教材だといえよう。しかも、このニュースステーションのケースは、場合によって実物などで代替が可能、という類のものではないため、ここに発想力やこのような水準で視覚に訴える必然性がある。同様のことが私たちの実情において技術的に可能かといえ、そうではないと思うが、視聴覚教材の本当の意味での活用はこのようなことではないかと思う。

授業の今後の可能性とは、このような類の発想をいかに具体化するか、ということに見える。

（６）授業の「水準」をどうとらえるか

明治大学教授で『声に出して読みたい日本語』の齋藤孝氏は、古典といわれる難しい「本物の」教材に触れることの重要性を説いている。小学生には難しいと思われる水準の教材でも、児童自身は「本物」相手にそれにチャレンジし、その過程で教材の内容に加えて多くのものを得ているのである。そこには、絶対的に目指して欲しい水準が示されている。到達水準の一つの考え方としては、参考になるところがあるのではないだろうか。

また、これもテレビ番組でよく使われる手法であるが、ある内容について、「続きはCMの後で」とコマーシャルを挟んで見せる演出がある。この方法は報道系の番組でも使われているが、このことについて、放送作家のおちまさ氏は、「これはバラエティの手法であって、報道ではやるべきではない」と自ら出演するラジオ番組で発言している。それは、報道の真の目的とは何か、を問う考えである。報道においては、事実を極力客観的に「ありのままに」伝えることが第一義的な目的であるため、伝えることを最優先に考えるべきであるということである。そのため、コマーシャルを跨いで伝えることは、報道の本来の目的からすると適切ではないのである。ここには、真の意味で受け手のことを考えて「見せる」ことを追求すべきだという、やはり報道に携わるものとしての「水準」がみえる。

（７）メディア・リテラシー

2007年1月に話題となった、某テレビ放送局の教養バラエティ番組の内容ねつ造について、その番組枠（日曜21:00）の次で報道番組の司会をしている芸人コンビ爆笑問題の太田光氏は、急遽番組が変更になりその報道番組が1時間繰り上がった番組中で、「おそらく、このことを真っ向から攻撃できるテレビ関係者はいない」と発言している。テレビを常に疑えというわけでは勿論ないが、メディア・リテラシーの観点からすると、例えばテレビ番組は、番組制作者の意向が何らかのかたちで反映している時点で、多少の傾向がかかっていると考えてよいのではないだろうか。取材の未得ている多数の映像素材からどの「画」を使用するか、長さをどのくらいにするか、いくつの素材を組み合わせるか、順番をどうするか、コメントをどの順番で採用するか、など。こうして考えれば、視聴者の側にもそれらを踏まえて見る力が要求される。

このような力は、少なくとも社会に出る直前の高校の段階で、ある程度養われていることが望ましい。そのためには、複数の要素が交錯している情報を扱い、解析して、本質を見抜くための経験もまた必要で、本来それは高校での学習段階で醸成されるものであろう（もっとも、カナダでは小学校の段階で専用の教科書を用いてメディア・リテラシーを教えているようである）。

4 これまでの授業実践（教材で取り扱った題材と教具）

①公民科『時事研究』

（七戸高校 学校設定科目 平成26年度～令和元年度 3年次 選択者）

- ・1時間1テーマで、ニュース解説的な内容。
 - ・感想など自由記述ありで授業プリントを毎時回収（次時返却）。
- （取り扱ったテーマの一部を紹介しました）

②地理歴史科『地理研究』

（七戸高校 学校設定科目 令和4年度 3年次 選択者）

- ・1時間1テーマで、別授業『地理B』で扱う内容を掘り下げ視点を加えて解説。
 - ・感想など自由記述ありで授業プリントを毎時回収（次時返却）。
- （取り扱ったテーマの一部を紹介しました）

③地理歴史科『世界史研究』

（七戸高校 学校設定科目 令和2・3年度 3年次 選択者）

- ・1時間1テーマで、別授業『世界史B』で扱う内容を掘り下げ視点を加えて解説。
 - ・感想など自由記述ありで授業プリントを毎時回収（次時返却）。
- （取り扱ったテーマの一部を紹介しました）

④公民科『時事探究』

（三本木高校 学校設定科目 令和5年度 2学年 特定クラス）

- ・公民科別授業『公共』内容中の事柄を掘り下げ、クラス内で、個人考察～グループ討議（ワークシートを紹介しました）

5 「公共」の名のもとに

①公共の福祉

「人権が衝突した際に「調整する」原理が「公共の福祉」

NHK『高校講座 政治経済 第6回 新しい人権』

講師 明治大学特任教授 藤井 剛 氏

②公共哲学

政治学者の篠原一氏によれば、日本の場合、「公共」の形成が遅く、国家公共でない市民公共が議論の対象になったの

は最近のことであった。「公」と「私」は対等ではなく、特に上下関係で使われることが多く、滅私奉公になりやすい。例えば江戸時代の幕府直轄領と大名の私領、個々に関わる人々の上下関係などにみられ、歴史的な経緯でもその一面は確認できる。従って、「公」の中に公衆や民衆はおらず、「公衆」も限られた範囲にしか使われず、実質的に「官」を指していた。因みに、中国の場合「公」は共通・共同のものを指すが、民衆は含まれない。欧米、特に、国立学校と私立学校、そしてパブリックスクールが存在するイギリスでは公衆という概念がいち早く成立している。

山脇直司氏（元星槎大学学長、元東京大学大学院総合文化研究科教授。平成18年度青森県高教研地歴公民科部会研究大会講師招請。八戸高校卒業）は、従来の公私二元論に代わり、「政府や官の公」「市民、国民、住民の民（＝公共）」「私的領域」の相関的三元論の視座を提唱している。これは山脇氏などにより説かれている「公共哲学」という概念であるが、ここでの「市民、国民、住民の民」は「公共」という言葉で表せる。因みにこの「公共」という語は、日本のそれと例えばヨーロッパのそれとは、意味合いが異なる。ヨーロッパでは、「自分が所属する地域・共同体」という概念が発達しており、商業活動等で富を蓄えた者は、その共同体のために、公園や広場、噴水、像などを寄付という形で寄贈し、誰でも使えるようになっているという。ここに、「自分たちの地域社会は自分たちでつくる」という意味を含んだ「公共」の概念が見える。山脇氏が提唱している「公共」はこのような意味でとらえることができるし、この項冒頭の「公共」もこのような意味と考えていただきたい。

公共哲学によれば、公私二元論ではない相関的三元論では、個人が積極的に地域社会をつくると考えることができるが、それは究極的には個人レベルでの自覚と取り組みが必要だということに通じる。

③公共放送

NHKの受信料について

民主主義を支える重要なメディアとしてNHK

- ・依然としてテレビは速報性が高く、ジャーナリズムとして公共的役割がある。
- ・民法は、広告を収入の柱とし広告主を意識せざるを得ない。
…番組が似通う懸念があり、そこに公共放送の存在意義がある。
- ・公共放送は、国民の支持がないと成り立たない。

6 おわりに 「風呂敷のような公民」

“風呂敷”とは、私が、以前（20年以上前）、ある日本人ミュージシャンの書籍のインタビュー記事の中で、そこでのやりとりで“風呂敷のように、いろんな要素を自分の音楽に取り入れる”と語るミュージシャンに、インタビュアーが“世界で一番便利なパッケージと言われる風呂敷ですね”と言っていたのが印象に残っていたことからだが、「公民」もまた、風呂敷のようにいろいろな要素を包み込む懐の広さがあると思う。そういう意味では、公民科目は、自由度がとても高く、ゆえに、教師の側の発想の豊かさが問われる。これからの授業においても、その自覚をもち教壇に立ちたいと思う。

※資料出所

- ・『週刊文春』
- ・webサイト『NHK』日本放送協会